

令和3年度マダラ本州日本海北部系群、ムシガレイ日本海南西部系群、
ソウハチ日本海南西部系群およびニギス日本海系群
の管理基準値等に関する研究機関会議 議事要録

日 時：令和3年10月26日（火）、13時～17時

場 所：Teams によるオンライン会議

参加者：外部有識者2名、事業関係者及び機構関係者を含め、58名

概 要：

マダラ本州日本海北部系群、ムシガレイ日本海南西部系群、ソウハチ日本海南西部系群およびニギス日本海系群について、水産研究・教育機構（機構）が作成した研究機関会議報告書案の管理基準値案および漁獲管理規則の部分を中心に説明し、議論を行った。マダラ本州日本海北部系群について、将来予測の計算に誤りがあるのではとの指摘があり、後日、再検討してメールにて承認作業を行うことになった（後日、修正後の報告書案を提示して承認作業を行った結果、報告書案は承認された）。ムシガレイ日本海南西部系群、ソウハチ日本海南西部系群およびニギス日本海系群の報告書案の説明に対しては大きな異論は出ず、報告書案は承認された。

主な議論：

・マダラ本州日本海北部系群

マダラ本州日本海北部系群の研究機関会議報告書（案）について、担当者から説明が行われた。

機構関係者から、ABCを決める時の基準を前年の親魚量とすることについて、前例がなく、変則的な使い方だと思うが、理由は何かとの質問があった。それに対し、担当者から、ズワイガニ日本海系群 A 海域も同様であるが、漁期後の親魚量を用いているためとの回答があった。機構関係者から、frasyr を用いず、独自に将来予測を行っているのかとの質問があり、担当者からその通りであるとの回答があった。機構関係者から、frasyr を用いていないことを報告書に明記するべきとの指摘があった。

機構関係者から、将来予測において、調整係数 $\beta=1$ でも目標管理基準値を上回る可能性が非常に高い。また、 $\beta=1$ の将来予測による平均親魚量は、SBmsy に近くなるはずであるが、そうならないとの指摘があった。それに対し、担当者から、会議後に確認するとの回答があった。そのため、会議内での承認作業は行わず、後日、メールにて修正案を提示し、承認を得ることとした（後日、修正後の報告書案を提示し、報告書案は承認された）。

・ムシガレイ日本海南西部系群

ムシガレイ日本海南西部系群の研究機関会議報告書（案）について、担当者から説明が行

われた。

機構関係者から、報告書には、2022年の親魚量は限界管理基準値を下回るとあるが、資料を見ると2022の資源量は2,200tで、限界管理基準値を上回っており、表現が一致していないとの指摘があった。それに対し、担当者から記載が間違っていたため、修正するとの回答があった。

議論終了後、承認を求めたところ、異論等はなく、本系群の研究機関会議報告書は承認された。

・ソウハチ日本海南西部系群

ソウハチ日本海南西部系群の研究機関会議報告書(案)について、担当者から説明が行われた。

これに対し、特段の意見等はない。その後、承認を求めたところ、異論等はなく、本系群の研究機関会議報告書は承認された。

・ニギス日本海系群

ニギス日本海系群の研究機関会議報告書(案)について、担当者から説明が行われた。

有識者から、今までの管理基準と比べると、厳しい管理になっている。2系ルールは、ニギスの実際の漁業を反映しているのか、逆に言えば、今までの管理基準値に近くなるようなデルタは設定できないのかとの質問があった。それに対し、担当者から、デルタを変えることは可能ではあるが、MSEを行う必要があり、現状ではデルタの変更は提案できない状況にあるとの回答があった。機構関係者から、これまでも2系ルールでは厳しいABCが出やすいとの意見を頂いており、今後の会議で指摘される可能性は認識しているとの発言があった。

事業関係者から、TACになる場合、かなり厳しい値が採用されると思われるが、この場合、日本海全域で制限されるのか、地域的に制限されるのかとの質問があった。それに対し、担当者から、海域ごとの違いは検討しており、石川県は資源状態が良いが、県のくくりと生物としての実態を鑑みるに、妥当性のある分け方はなかなか難しいとの回答があった。機構関係者から、日本海ブロックの関係者の方と相談しながら進めたいと考えており、プロダクションモデルの導入等を検討していきたいとの回答があった。

議論終了後、承認を求めたところ、異論等はなく、本系群の研究機関会議報告書は承認された。

・講評

有識者から、多くの会議が行われ、会議の位置付けが明確ではないとの指摘があった。再生産関係のホッケースティック型で折れ点が過去の最小値になっているのは、保守性を担保するためであるが、Bmsyの到達確率は保守性を考えない確率になっているため、シミュ

レーション的に β をもう少し高い値に設定しても良いのではないかと、今後、検討しても良いと思うとの意見があった。

有識者から、会議が複数乱立しており、会議の趣旨の仕分けがわかりにくいと感じるとの指摘があった。ニギスにおいて行われた2系ルールの説明はわかりやすく、ステークホルダー会議等でも、できるだけ視覚的にわかりやすい説明に努めるべきとの指摘があった。

・その他

事業関係者から出された「2そうびき沖底の主要対象種であるアカムツ・ソウハチ等とムシガレイの月別・海区別漁獲量比のマップ作成」、「コッドエンド目合拡大によるムシガレイのF削減効果とアカムツ等主要漁獲対象種の水揚額減少の試算」、それら資料の簡易版公表時の参考資料としての公表について、議論が行われた。

機構関係者から、これらについては研究機関会議で議論する内容から外れるため、その他で意見交換させて頂くとの説明があった。

機構関係者から、沖底のCPUEマップを作ることは可能であるが、国際関係を考慮する必要があり、簡易版と合わせての公表は適切ではないため、水産庁に確認して慎重に進めたいとの説明があった。

Fの削減効果試算については、機構関係者から、現状でアカムツの資源評価には資源量指標値を用いており、VPAが導入できていないため、Fの削減効果の試算を早急に行うことは困難であり、日本海ブロック資源評価担当者会議などを通じて関係者に協力をお願いしながら慎重に進めたいとの説明があった。

事業関係者から、説明については納得したが、底びき網のような様々な魚種が入網する漁業においてTAC管理を導入することについて、現場の理解が得られないと思う。そのため、研究機関としてもこの部分について検討して欲しいとの意見があった。機構関係者から、日本海ブロックとして検討を進める必要があると認識しており、機構としてもできることから進めていきたいとの回答があった。

以上